記念講演　「グローバル化と大学の使命」

李　　哲

蔚山大学と20年にわたり交流を続けてきた島根県立大学の学生諸君と、また本田学長をはじめとする教職員の皆様にこのキャンパスでお会いすることができ、とてもうれしく思います。このような機会を設けて下さった本田学長に御礼を申し上げるとともに、みなさまの前で講演の機会を頂いたことを光栄に存じます。

本日の私の講演のテーマは、「グローバル化と大学の使命」といういささか月並みな内容かもしれません。講演のご依頼を受け、どのような話をするか悩んだ末に決めた主題であります。

伝統的に、大学の使命は「研究」「教育」「奉仕」であると定義されます。言い換えれば、「真理の探求」や「指導者養成」を通じて、地域社会、国家、さらには人類のより良い未来を実現することであると考えます。

20世紀前後より、世界は産業社会から知識基盤社会に急速に変化しています。情報・通信技術や交通の発達により、情報の絶対量とその拡散が幾何級数的に増加し、人的・物的交流、社会変化の幅や速度が激増しています。グローバル化による競争が激しくなり、個人的また国家的エゴイズムや富の独占、物質主義が深化し、環境問題、疫病の拡散、宗教的・人種的対立による戦争や暴力が絶えません。

このような変化の中で、大学は未来の指導者の養成よりも、社会や企業が直面している課題を解決できる実用的人材を効率的に教育することが求められています。メディアや大学評価会社がある基準に沿って大学の実績や能力を評価し、点数をつけ、全世界に大学ランキングを発表しています。大学ランキングが入学生の志願率や卒業生の就職、さらには給与水準にまで影響を及ぼし、大学間、そして大学内における学生同士の競争は世界的水準にまで拡大され、激化し続けているのが現実です。

どのような個人も組織も、停滞することなく発展していくためには競争が必要であり、急激にグローバル化する社会変化に適応するためには、国際化教育とともに実用的教育も必要であると思います。しかし、世界の大学評価項目には、就職関連の指標、外国人教授や学生の数、国際交流、外国語講座の数などの「国際化指標」が相当な割合を占めており、大学は、学生が「英語能力や国際感覚を備え、実用的知識や技術を習得し、企業から求められる人材を養成する」ことに注力しているのが現実です。もっと正直に申しますと、大学が「就職予備校」に転落しているのではないかとさえ憂慮しております。

大学時代は、一人の人間の生涯において、最も重要で意味のある時期だと思います。良い成績を収め、外国語を習い、部活、恋愛、ボランティア活動、インターンシップなどにも取り組み、就職の準備をし、時には学費も稼ぎつつ、一人で独立して生きていくための知識や技術を習得しなければならない時期です。しかし、大学時代に学生たちは、難解でありながらも意味のある経験をさせられることになります。成功と出世の意味、競争の目的、富や貧困の世襲と偏り、正義と道徳・倫理の問題、老人問題、安楽死、同性愛、国家間の紛争と戦争等に関して、前世代や既存の制度との葛藤や抵抗を通じて、たとえ答えを見出せなくとも、そのような問題について真剣に悩み、自分自身の人生、また自分と社会との関係について、新たな認識を持つようになる重要な時期であると思います。

大学時代に、自分自身に対する素直な省察を通じて、自分の中の利己心、欲や嫉妬、偽善などに一度でも向き合ったことがある人、もしくは個人と社会との関係、個人の社会的責務と献身、社会の不条理等について色々な葛藤を経験した人と、親の支えによって安楽に大学を卒業し、良い就職先に就き、個人的な成功を最優先にしてきた利己的人間とは、何が違うのでしょうか。

本日、私は大学の使命である「成熟した指導者の養成を通じて、地域社会、国家、さらに人類のより良い未来を実現すること」について、みなさまとともに考えてみたいと思います。私は、「人類のより良い未来」とは、各個人が今よりも健康で、生きることの意味とやりがい、価値と矜持を感じ、能力のある者とない者、富裕な者と貧しい者が、互いを尊重・理解し、助け合う社会であると考えます。また、個人レベルを超え、国家レベルにおいても、他国の文化、宗教、人種的差異を理解・尊重し、強国による一方的な強要や搾取のない、協力し合いながら平和的に過ごすことのできる社会であると考えています。なぜなら、グローバル化時代においては、ある国家が独りで、または自分たちの好きなように生存することはできなくなっているからです。その理由については後ほどまたお話させていただきます。

私たちは、他者と共生しなくてはならず、一個人がひとりで幸せになることはできないということを、先人たちから何度も聞いてきましたが、社会は徐々により競争的で、利己的で、貪欲で、殺伐となってきています。そして、貧困問題、暴力、戦争、国際紛争はさらに深刻になっています。万が一社会の構成員それぞれが、一時的にせよ自分と社会についての真面目な省察の経験を持っているのであれば、私たちの社会は今より物質的にはそれほど豊かでなくとも、はるかに平和的で「人間尊重的」になっているでしょうし、未来は今よりもはるかに希望に満ちているだろうと思います。

蔚山大学は 44 年前の 1970 年、創意的な実用人材の養成を目的として設立され、韓国で初めて産学協力教育を導入し、グローバル化の趨勢に対応しながら、外国語教育、海外交流を拡大して来ました。また、情報活用能力を通じて、創意的、自己主導的な学習態度を習得するために、「スマート・キャンパス」を構築しました。そして全ての学生、教授、

職員にiPadを支給し、韓国の大学では初めて講義の一部をiTunes-Uにアップロードしています。さらに、卒業生たちが職場や地域社会の中で「リーダー」になれるように、人格教育[1]を強化しています。

蔚山大学は大学設立者である峨山（あさん） 鄭周永（チョンジュヨン）先生を人格教育のロール・モデルとし、学生への体系的人格教育とリーダーシップ教育推進のために、「峨山リーダーシップ研究院」を設立・運営しております。

峨山先生自身は、祖父から千字文や『小学』『大学』『孟子』などの中国古典を教わり、小学校における３年間の教育がすべてという人物でしたが、現代自動車や現代重工業などの「現代グループ」を設立し、韓国の経済発展に大きく寄与した方です。さらに中学、高校、大学の設立をはじめとする教育事業や、峨山社会福祉財団の設立による奨学事業や医療事業、オリンピック誘致などのスポーツ文化事業、南北の交流拡大を通じた統一事業など、多方面にわたって韓国の発展に実質的に寄与した方でもあります。

ここで、本日のテーマに関係する蔚山大学峨山リーダーシップ研究院が行っている「人格教育プログラム」をご紹介致します。

北東アジアの知的伝統により、私たちは人格を「人間であれば備えるべき最も重要な品性と可能性」として認識し、将来本学の卒業生が備えるべき人格として「他人と共生できる人間」を目標として掲げて来ました。「他人と共生できる人間」に求められる徳目として、「人間に対して礼儀正しい人」、「偏見とドグマから解放された人」、「自らの変化の可能性を信じる人」の三つを定めました。ここでいう「他人」とは、単に家族、同僚、同じ学校、同じ宗教、同じ地域、同じ国における自分以外の人々を意味するだけでなく、他の民族、他の国家、他の宗教の人々すべてを含む「人類的」な意味として捉えていただければと思います。

そして、これらの三つの徳目を備えるための具体的な実行領域として、以下のような「差異」「関係」「共感」の三つの領域を定めました。

（１）「差異」領域の人格教育とは、「差別と差異の区分」、「差異の尊重と配慮する態度の培養」、「差異の認識にともなう自発的な変化を通じ、矜持と自己発展を体験」させることにより、「差異」を理解・受容し、内面的な変化を経て自己発展の体験に繋げることが、「差異の人格」教育の目標であると言えます。

（２）現代の個人主義傾向は、若い世代を他人との関係に鈍く、自己変化に消極的な人間にさせると考えられています。それゆえ、「関係」領域の人格教育とは、関係に対する鈍感さや変化に対する消極さを是正し、「配慮」と「疎通」、そして「互恵的相互作用」を体験させることにより、自分と社会の変化に繋げることが、「関係の人格」教育の目標であると言えます。

1　韓国語では「人性」＝人間性と表記されているが、ここでは「人格」と訳した。

（3）「共感」領域の人格教育とは、現代社会の一面である「共感能力の喪失」を回復させるための教育です。他人の苦しみや幸せ、悲しみや喜びを健康的に共感することのできる人間は、たとえ困難に直面した人に対して十分な親切と配慮を実践できないとしても、せめてそれを利用したり、卑下したり、残忍に接することはないでしょう。共感した分だけ他人を理解することができるゆえに、共感能力は意志疎通の土台であると言えます。人の考えや感情、置かれた状況に対して深く共感し、真に理解し、通じ合い、適切に配慮することのできる能力を備えるようにすることが、「共感の人格」教育の目標です。

次に、「グローバル化」についてお話したいと思います。

情報・通信、交通の発達とインターネット、YouTube、Twitter などの拡散によって、個人はリアルタイムに世界と疎通し、全世界が一つの生活圏になりました。地球の反対側のある地域における局地的問題が、ただちに世界的問題として拡散し、他国に影響を与えるようになりました。西アフリカのエボラ・ウィルス感染、ウクライナ情勢、中東の ISIS の蛮行などが瞬時に知らされ、世界各国の経済、環境・保健、安全保障などに影響を及ぼしていることが、その一例であると言えます。大学に関する例をあげますと、QS 世界大学評価（QS World University Rankings）、ライデン・ランキング（CWTS Leiden Ranking）のように、全世界の大学を評価して序列をつける現象や、みなさまもご存知のように、韓国歌手の「サイ（PSY）」の「江南（カンナム）スタイル」という風変わりな「馬ダンス」や歌があっという間に全世界に広がり、全世界の人々が真似をするほどの流行となりました。これも、大衆文化の「グローバル化」の一例であると言えるでしょう。

「グローバル化（Globalization）」とは、国際化（Internationalization）と重なり合った多次元的な現象であり、経済、社会、文化などにおいて国家間の障壁が縮小する一方で、人間と物資、技術、文化などの交流が拡大し、それによって国際協力が強化されるものの、他方で競争も地域や国家というレベルを超え、世界が舞台となるような時代的な変化を意味していると思います。

「グローバル化」は政治、経済、社会、文化などすべての分野において避けることのできない趨勢であり、大学もその例外ではありません。しかし、「グローバル化」は肯定的な側面だけを持っているわけではなく、「グローバル化」による否定的な側面についての認識と対策も切実であると思われます。

「グローバル化」の過程において最も懸念されているのは、先進強国による政治的・経済的・文化的な独占の深化であります。言い換えるならば、従属の深化であり、商品だけでなく、言語、文化、情緒、行動様式、価値観までも、とりわけ西洋のものであれば分別なく真似たり同化したりするという現象であります。たとえば、言語においても、20 ～ 30 年前には国際学術会議では英語以外にもドイツ語やフランス語、スペイン語で発表することがありましたが、インターネットの拡散の影響か、今や英語だけが学術用語として

定着してしまいました。また、暴力・ポルノなどの大衆文化や米国式ジャンクフードの世界的な拡散、さらに西洋の個人主義など、西洋的価値観の無分別な浸透、同化、崇拝の風潮が、はたして望ましい現象であるのかどうか、心配せざるを得ません。東洋であれ西洋であれ、キリスト教であれ仏教であれ、日本であれ韓国であれ、全ての地域で国家はそれぞれ固有の歴史と文化を持ち、それらは必要に応じて受け継がれ、発展してきたという事実に留意しなければなりません。

私は、先ほど、蔚山大学の人格教育の目標を「他人と共生する暮らしに相応しい人が備えるべき最も大事な人格徳目の教育」とし、自分自身と他者との差異を認め、それを理解し、尊重し、共感し、配慮する人格を取り揃えるようにすることであるとお話しました。

これは国家間においても同様であると思います。「グローバル化」時代に、他国と共生しなければならないとすれば、他国と戦争せずに平和に暮らしたいのであれば、自国と他国の差異を認め、彼らの文化や価値観、宗教を理解し、尊重し、共感し、配慮する姿勢をそなえるべきであると思います。

自分と他者との差異を認め、他者を理解し、尊重するためには、自分は誰なのか、自分の長所は何なのか、自分の考えと価値観は他者にも正しいものであるのか、自分の足りないところは何なのか、自分は他者から何を学ぶことができるのか、といった正直で誠実な自己省察の過程が欠かせないのと同様に、国家間でも自己省察の過程が必要であると考えます。わが国やわが民族の長所は何か、何を守るべきか、外国から受け入れるべきものは何なのか等に関する省察が必要となります。これは島根県出身の大碩学である西周先生が、明治時代にヨーロッパの思想が導入される過程で、日本には儒教的倫理が適さないと排斥される中にあって、日本の伝統と精神を失うまいとしたことと同様の態度であると思います。

そうであるならば、集団や国家レベルでの自己省察の過程は、どこから始めるべきでしょうか。政府や政界からでしょうか、もしくは宗教界からでしょうか。国家はもとより宗教も、どのような集団であれ、本来の目的があるゆえに、成熟した個人とは異なり、一旦集団が構成されれば集団的エゴイズムを克服することはとても困難であると思います。だからこそ、国際社会では国家間の紛争や戦争が絶えず、甚だしくは愛と容赦、慈悲を教理とする宗教間においても対立が続き、反目しているのが現実です。「グローバル化」が拡大することで、集団・国家間の葛藤もまた、以前より深化されるのではないかと憂慮されます。

結局、答えは基本的な原則に帰着します。集団や国家を構成する個々人が、特にリーダーが、自己省察を通じて変化し、成熟することによって、他国との差異を認め、理解し、意志疎通をし、学び、協力することに先駆けないならば、集団や国家が変わることは困難であると思います。しかし、変わらなければ、私たちや私たちの子孫が、自分のものを守り、平和で幸せに暮らすことはできないでしょう。

「グローバル化」の拡大にともない、競争は激化し、実用的な技術や知識ばかりが強調される時代にあって、学生各自が自己省察の経験を通じて未来の成熟した指導者として成長できるようにする。そして、より良い人類の未来にそなえた人格教育を実施することは、「グローバル化」時代に大学が決して疎かにしてはならない重要な使命であると考えます。

日本と韓国は、歴史的には難しい時代もありましたが、地理的・文化的に最も近い国であります。蔚山と島根県は特にそうです。今後、蔚山大学と島根県立大学が、これまでの 20 年から、さらに相互理解を深め、協力し、より成熟した関係に跳躍することを祈念致します。学生同士の交流のみならず、研究及び学術交流を拡大していくためにも、本日締結した島根県立大学「NEAR センター」（Institute for North East Asian Research）と蔚山大学校「人文科学研究所」の交流協力協定、そして、この後開催されるシンポジウム「日韓関係を展望する―北東アジアにおける蔚山と島根の絆―」が、今後の両校の関係を象徴する有意義な第一歩になることを期待しております。

みなさまとお会いすることができ、とても嬉しく思います。このような貴重な場を設けて下さった本田学長や関係者のみなさまに衷心より御礼申し上げます。

ご清聴頂いたみなさまと島根県立大学のご健勝を心より祈念致します。

ありがとうございました。

（日本語監修　井上厚史）

（LEE Chul）